

「思う／考える」における意味の境界と分節 — リアリティーから見る言語 —

中川正弘

0. はじめに

英語の動詞 « think » は日本語に翻訳するとなると、「思う」と「考える」の二つから選ぶことになる。日本人はちょっと迷うとしても選べないというほど考え込むことはない。しかし、日本語を学んだ外国人は日本人とは違う迷い方をするだろう。

そんな外国人の書いた日本語を読んで、あるいは話すのを聞いて、日本人はどちらが使ってあっても大した問題ではないと考えはするが、二つの動詞、「思う」と「考える」の選び方が日本人のものではない、日本人とは違うと感ずることがよくある。

彼らは「使い分け」がよく分からないながら適当に混ぜて使っているようなのだが、それを聞いたり読んだりした日本人が「それはおかしい」と指摘することはめったにない。どちらを選んでいても英語の « think » を日本語に翻訳していることは理解でき、彼らが伝えたい「内容」は問題なく受け取れたと感ずる。

日本人サイドはそれでまったく問題がない。しかし、外国人サイドはどうだろうか。明確な意味の境界、分節、選び方が日本語教育で示されているわけではなく、日本人の「自然／上手」な使い分けを見よう見まねで習得するしかない。

日本人が日本語を英語に翻訳する場合は「2語（思う／考える） ➡ 1語（think）」の簡単な変換であるためまったく問題がない。また、日本人に限らず、ややこしいことは考えない子供はそれで日本人の選び方をコピーできる。けれども、自身の母語、英語のような媒介言語と比較、対照しながら日本語を学ぶ外国人は「1語 ➡ 2語」の変換ルールが確立されない限り迷い続け、現状では以下の三つの方針のどれかをとるしか解決法がない。

- ①「思う」だけを使う。
- ②「考える」だけを使う。
- ③「思う」と「考える」をいっしょに混ぜて使う。

外国人がこれらの方針のどれを選んでいても、「一文だけ」を披露する限り、「文法的に正しい日本語」になっている。違和感、「日本人ではない」という印象、何らかの意味が生じるのは、長く話したり、書いたり、「think」の日本語翻訳を何度もする時だ。その時、これら三つの方針はそれぞれ特異で有意味な特徴と見えてくる。

かない。そこで視点を変え、人間のリアルな「思考」がどのようなものかを確認してみよう。

間違いなく「考えている」と言える時間を想起していただきたい。その時、私たちの脳内で行われている活動は「複数、あるいは多数の概念、イメージの想起」「比較・対照」「肯定／否定」などからなる。確かに「複雑」であり、これに「行きつ戻りつ」「強調」「スピードアップ／スロウダウン」が加わるのだから、ひじょうにアクティブだ。

第三者の目に映る「考える人」のイメージはオーギュスト・ロダンの彫刻作品のように静謐なものだが、今考えていただきたいのはそんなものではなく、自分が現実には時間軸上で遂行するプロセスだ。「考える」は一瞬の中に孤立しているわけではない。その時間は3秒、30秒、1分、10分、60分、・・・と違って来るが、どの場合もその行為・行動には必ず「始まり」がある。

いつどのように考え始めたか正確に想起することはできないかもしれないが、「考える前の時間」、あるいは「考えていなかった時間」から「考え始めてからの時間」に切り替わった時のことは記憶に残っていきやすいのではないだろうか。その始まりの瞬間からずっと同じ調子で先に並べた複雑な行為の組み合わせが展開することはまずない。

日本語は「・・・は・・・」と何か言葉を一つ主題として思い浮かべ、それからそれについて考えることが多いのだが、その言葉は明確な意志をもって主体的、主導的に選ぶのではなく「到来する」と感じられるものが多い。言葉をこのように**受動的**に迎え入れ、それに対して「好き／嫌い」「いい／悪い」など、ごく単純な評価を下しているだけのことがよくある。『枕草子』はその典型だ。わたしたち日本語を母語とする者の意識は受動的でシンプルな「**言葉の到来**」から始まり、徐々に、あるいは急速に複雑でアクティブなものに変わって行く。

「言葉の到来」で始まった後、さまざまに試みられる「考える方法」を日本語では「**思案・思索・思惟・思弁**・・・」など「**思+α**」で表す。これらは「**思考**」と区別し、特殊な意味合いを込めて使われていると感じるかもしれないが、二つ目の漢字で表そうとするものはどれも「**シンプルで受動的**」ではない、つまり「**複雑でアクティブ**」だから付加されている。「**思考**」はこれら特殊な「方法」を包括する一般概念と言える。

念のためにこのプロセスの終わりも確認しておこう。「考える」という言葉の典型的イメージ通りの「**複雑でアクティブ**」な時間の後、このプロセスは収束を迎える。アクティブだった「**思考・考察**」が、一時的なものであれひとつの判断にまとめられ、行為・行動としては停止する。「序論+本論+結論」あるいは「テーズ+アンチテーズ+サンテーズ」という論文に求められる展開は、「**思考**」のこのような「**静 → 動 → 静**」の自然なプロセスを映している。

2. 思考プロセスの「始まり」と「終わり」

現実の思考プロセスとこのように照らし合わせると、わたしたちは英語が「think」一語で捉えているものを日本語が「思う／考える」の二語で捉えていることを見直す新たな視点が得られる。しかし、「思考」のプロセスを時間軸上に展開する「線状のもの」として見ると言っても、それを前半と後半の二つに分けようと言うわけではない。客観的にどのくらいの密度まで「シンプル」で、どのくらいの密度から「複雑」と言うことができないということは、この一つのプロセスを前半と後半に分けるための基準を立てることは不可能ということだ。

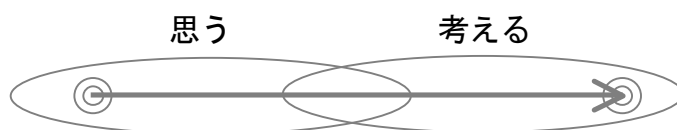
ここで考慮に入れなければならないのは二分割の仕方、つまり「思う」「考える」の選び方が、ひとりひとりの日本人にとってはハッキリしている一方で、どちらにしようか迷ったり、どちらでも構わないと感じたりする場合があるという事実だ。この「思考プロセス」は、始めと終わりが区別されているだけで、その途中、中程あたりでは二つの動詞の選択基準がかなり緩くなり、他の人の話や文章であれば、自分と違う選び方をしてもそれはそれで自然だと感じる。

一つの行動と捉えられる「思考」は一本の線のイメージになりやすいが、線はそもそも点Aと点Bの異なる二点によって定義されるだけで、「中間地点」などないのだから、「中程」に実体などなく、それは「平均」のように人間だけに見える記号的幻想なのだろう。

選択基準がハッキリしていながら、どちらでもいいと判断できるというのは一見「矛盾」している。しかし、これらが両立する定義の立て方がないわけではない。

プロセスの始まりを含むが、終わりは含まない → 「思う」

プロセスの終わりを含むが、始まりは含まない → 「考える」



このように考えれば、

- ① 「思う」でなければいけない場合
- ② 「考える」でなければいけない場合
- ③ 「思う／考える」のどちらでも構わない場合

の三つの可能性が矛盾なく区別できる。ここまでに何度も使ってきたが、「思考」という漢語表現はこの言葉が表す線状のプロセスの両端、あるいは二極の関係をうまく表して

いる。

3. 中世フランス語の « penser » と現代フランス語の « penser »

日本語についてはこれで納得できそうだが、他の言語ではこのような「思考プロセス」をどう認識し、どう扱っているだろうか。「思う／考える」と言えばまず想起されるフランスの哲学者デカルト (René Descartes, 1596-1650) を見てみよう。

よく知られるデカルトの言葉、« je pense, donc je suis. » の日本語訳はかつて標準だった「我思う、故に我有り」から「我考える、故に我有り」を標準と考えるように変わったようだ。この変更によって « penser » の解釈は「シンプルで受動的」から「複雑でアクティブ」に変わったと感じる。しかし、この「二者択一」と見える解釈の変更の問題はないのだろうか。

ここでフランス語の一つの歴史的変化に注目したい。中世フランス語の散文作品、例えば『アーサー王の死』の現代フランス語訳 *La Mort du roi Arthur*¹⁾ には動詞 « penser » が 224 ページ中 114 回出てくる。しかし、その原典となっている中世フランス語のテキスト *La Mort Le Roi Artu*²⁾ で « penser » がどれくらい使われているか見てみると、269 ページ中 76 回しか出てこない。中世フランス語から現代フランス語への翻訳で翻訳者が 2 倍近く増やしたのかということそうではない。

実は現代フランス語で « penser » と訳される中世フランス語の動詞はもう一つ « cuidier » があり、こちらは « penser » より出現回数が多く、269 ページ中 97 回使われている。現代フランス語訳で « penser » が 114 回、中世フランス語の原典で « penser » 76 回 + « cuidier » 97 回 = 173 回と数字が合わないのは、現代フランス語訳では « à mon avis (私の考えでは) » など同義的、類義的な表現が言い替えにかなり使われるためだ。

使用例：3 段目

【中世フランス語】 Or vos demant ge, fet li rois, quanx chevaliers vos **cuidiez** avoir ocis de vostre mein en ceste queste.

【現代フランス語】 – Je vous demande donc, dit le roi, combien de chevaliers, **à votre avis**, vous avez tués de votre propre main pendant cette quête."

「それでは訊ねよう、と王は言う、この探索において、そなたは自分の手で何人の騎士を殺めたと思う？」

【中世フランス語】 Et messires Gauvains **pense** un petit et li rois li dit autrefois: « Par mon chief, ge le vueill savoir, por ce que aucun vont disant que vos en avez tant ocis que c'est merveille.

【現代フランス語】 Messire Gauvain s'étant pris à **réfléchir** quelque peu, le roi lui dit à nouveau: – "Je vous le jure, je veux le savoir, car d'aucuns répandent le bruit que vous en avez tué un nombre incroyable.

するとゴーヴァン卿はしばし**考えこんだ**ので、王はまた言った – 「余はどうしても、それを知りたいのだ、なぜならみなのは、そなたがじつに驚くばかり大勢の騎士を殺めたと申しておるからじゃ」

単純に言えば、中世フランス語で「思う／考える」という意味で標準と見えるほど使

われる動詞は「*cuidier*」だった。それが現代では「*outrecuidant* (自信過剰の／うぬぼれの強い／横柄な)」のような表現に痕跡を残すだけでまったく使われなくなる。フランス語の歴史におけるこの動詞の消失について中世フランス語研究者 *Christiane Marchello-Nizia* は「主観性」の色が濃かったフランス語が「客観性」を基調とするように変化したことを示す一例だと指摘している³⁾。

しかし、よく考えてみれば、中世フランス語で「*je cuid*」が「主観性」を強く表していたとして、それを近代には使わなくなり、代わりに「*je pense*」を使うようになったことで「客観性」が表現されるようになったと果たして言えるだろうか。これらはどちらを使おうが「主観」の表現と見なされるはずだ。

それでは「*cuidier*」と「*penser*」が共存していた中世フランス語ではどのような使い分けがされていたのだろうか。フランス語辞書で「*penser*」の語義の説明には「*concevoir, imaginer, évaluer, apprécier, réfléchir, méditer, croire, estimer, juger, ...* (英語: *design, imagine, evaluate, assess, reflect, meditate, believe, estimate, judge*)」など、特殊な意味合いの動詞がずらっと並んでいる。だから、「*penser*」はそれぐらい特殊と言えるのかと言うと、そうではない。これら多くの特殊な動詞の代わりに使えるということは逆に「*penser*」が一般性のひじょうに高い動詞であることを示している。特殊に使い分けられる「男／女／大人／子ども／上司／部下／・・・」が一般名称(概念)の「人」に言い換えられるのと同じだ。一方、「*cuidier*」の語義の説明には「*penser, imaginer, se soucier de, prétendre, ...*」くらいしかあげられておらず、「*penser*」と区別できるような定義、使い分けの基準を求めても、トップに「*penser*」とあるのだから、二つの語義はほぼ重なりとしか見えない。

現代フランス語が「*penser*」一つだけで済ませているところを使い分けのハッキリしない二つの動詞を組み合わせて使う、これは最初に検討した日本語の「思う／考える」と同じ状況だ。そこで、先に言及した『アーサー王の死 (*La Mort Le Roi Artu*)』では「*cuidier*」がどのように日本語に訳されているかを日本語翻訳⁴⁾で見ると、だいたい「思う」と訳され、「思う：328回」に対して、「考える：94回」となっている。これだけで見れば、中世フランス語の「*cuidier / penser*」から「*cuidier*」が選ばれるより、日本語の「思う／考える」から「思う」が選ばれることが多いと考えてよさそうだし、日本人はそれで自然だと直感的に感じる。

日本語翻訳は「*cuidier*」＝「思う」と完全に対応させているわけではないが、中世フランス語の原文における「*cuidier*」の出現箇所を見ると、日本語で「考える」ではなく「思う」が選ばれて当然と思えるほど、「シンプルで受動的」な内容を従えている。また、「*moult* (たくさん)」のような量を表す副詞と組み合わせられ「よく考えた／考えに考えた ➡ 複雑でアクティブ」となるのは「*penser*」だけのようだ。

これだけの材料では完全な「論証」と言えないが、根拠ある「仮説」にはなるだろう。「思う／考える」と同様、

cuidier : 思考プロセスの始まりを含むが、終わりは含まない。

penser : 思考プロセスの終わりを含むが、始まりは含まない。

と定義できそうだ。

4. 思考の様態

「一つながりのプロセス」ではあるが、「始まり：シンプルで受動的／終わり：複雑でアクティブ」という正反対の様相を見せる行為・行動となっているのは「思考」くらいだが、このようなプロセスをただ一つの動詞 « penser » で表すようになった現代フランス語はプロセスの両端を見なくなったのだろうか。

ここで、フランス語と同じように「思考」を一つの動詞 « think » だけで表す英語に興味深い用法があることを指摘しておこう。英語の « think » には « I think / I thought » のように主格で人称が出る構文だけでなく、「me thinks / me thought」のように「思考」の主体であるはずの人間が与格で組み合わされる「非人称構文」があり、「It seems to me (私には思える)」と言い替えられる。

Hamlet : Madam, how like you this play? (王妃様、この劇はお気に召すでしょうか?)

Guertrude : The lady doth protest too much, **methinks**. (あの婦人は主張しすぎと思えます。)

【Hamlet Act 3, scene 2, 217-218】

シェークスピア (William Shakespeare : 1564-1616) の作品には150以上の用例があるそうだが、そのような古い用法の文化的記憶、遊技的引用なのかもしれないが、現代英語でも使われなくなっているらしい。

このような非人称の用法はそれ以前、ギョーム・ド・ロリス (Guillaume de Lorris : 1200?-1238?) の *Le Roman de la rose* (薔薇の物語) をチョーサー (Geoffrey Chaucer : 1340?-1400) が翻訳した中世英語の *The Romaunt of the rose* にも見られる。

And faste I slepte; and in slepyng Me mette such a swevenyng That lyked me wonders wel. 【25-27行】	そしてすぐ眠りました。そして、眠りの中で 夢がわたしに訪れ 驚きの数々がたいへん私には好ましかったのです
That it was May me thoughte tho -- It is fyve yer or more ago -- That it was May, thus dremed me , In tyme of Love and jolite, That al thing gynneth waxen gay 【49-53行】	みなさん、5月だと私には思えました 5年かそれ以上前 5月でした。そんな夢見が私にあったのです 愛と喜びの時期 あらゆるものが陽気になり始めます ⁵⁾

現代英語では「I met / I liked / I thought / I dreamed」という人称構文でしか使わない動詞がここでは「わたし」を与格、対格とする非人称構文、非主格人称構文で使われている。どの例でも「わたし」はアクティブな行為者ではなく、「到来した夢」を受け入れる、つまり受動的な存在だ。

「あなたのお気に召すなら」と訳せるフランス語の「s'il vous plaît」は「vous(あなた)」を与格で使う「非人称構文」だが、これを英語が移植した「if you please」の動詞「please」は現代英語では「you(あなた)」を主格とする人称構文と考えられているようだ。これをちょうど裏返したかのように、フランス語では人間が主格の人称構文しか使わない「penser」と同義と見なされる「think」を英語では人間が与格の非人称構文でも使うのだから驚きだ。

「I think」と人間を主格で使えば「**アクティブ**(⇒内容が複雑)」になり、「(It) me thinks」と人間を与格で使えば、「**受動的**(⇒内容がシンプル)」になるのだから、文法の論理を効果的に使ったレトリックなのかもしれない⁶⁾。

このような例を見れば、英語は「思考プロセス」を「think」1語で表してはいても、このプロセスに両端があること、始まりの「受動相」とそれに続く「アクティブ相」があることをちゃんと認識していたようだし、現代でもその痕跡が残っていると言える。

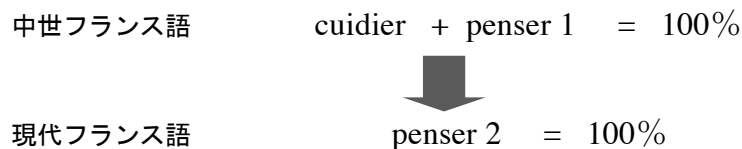
さて、そこで現代フランス語だが、英語の「me thinks」と構文が同じになる「Il me pense* (私には思える)」は使われていない。そのような意味は「Il me semble = It seems to me」、「Il m'apparaît = It appears to me」を使うだけでじゅうぶんと考えられるのだろう。

このように中世フランス語と現代フランス語、中世英語と現代英語、日本語を比べることで浮かび上がる差異を見なくては考え始められないことがある。「思考プロセス」を一つの動詞で表しているフランス語話者、英語話者、また多くの日本語を学ぶ外国人から、二つの動詞の選び方について説明を求められる可能性があるため、このような考察を試みたのだが、日本語話者、中世フランス語話者にとって二つの動詞の使い分けが明快で何の疑問も感じないことについてはもうすこし考えてみたほうがよさそうだ。

あちらからこちらを見て訝しく思うような場合、逆にこちらからあちらを見て同様に訝しく思っておかしくない。しかし、二つの動詞の組み合わせで「思考プロセス」を認識する日本人が一つの動詞しか使わないフランス語、英語を見ておかしいと言ったりはしていない。二つから選んだりしないでいいのだから、やはり簡単と感じる。だが、それでほんとうに事態を正しく見ているとは限らない。このような場合、錯覚があるにもかかわらずそれがなかなか露呈しないだけのことがよくある。

ありえない話だが、「cuidier(思う?)」と「penser(考える?)」を組み合わせる使う中世フランス語話者は現代フランス語の「penser」の意味をどう受け取るだろうか。当

然中世フランス語の « penser » の意味領域でしか受け取らないはずだ。そして、これも有り得ないものだが、もし中世フランス語話者用の「現代フランス語辞書」があれば、「penser」の語義としては « penser » だけでなく « cuidier » も書き込まれるに違いない。綴り方にまったく変化がなくとも « penser » の語義は中世と現代で同じではない。



同じことが日本人にも起こるのではないだろうか。日本人は « penser » の意味領域を「思考プロセス」全体としては認識しにくく、「始まりを含むが、終わりを含まない／終わりを含むが、始まりを含まない」のどちらかと認識するだろう。コミュニケーションの受信者がこのような受け取り方をしているとしても、それが発信者に分かることはおそくない。現実のコミュニケーションでは誤差の許容範囲に納まるだろうし、第三者の目にも、また当事者同士にも 100%理解されているように見える。

デカルトの « je pense, donc je suis. » の日本語翻訳については既に触れたが、「我思う」にしる、「我考える」にしる、日本語に翻訳された方は二つの動詞からひとつを選ぶ際、迷ったに違いない。その迷いは御自身が日常二つを使い分ける時には経験するはずのないものだ。そして、最終的に選んだものが「より適切だ」と総合的に判断してはいても、何か欠けてしまうと感じたことだろう。どちらを選んでも何か欠けてしまう、しかし、一つを選ばなければならないのだから、どちらがより適切か徹底的に考える。翻訳でそのような苦労された方々にこのようなことは言いにくいのだが、フランス語から日本語への翻訳でどうしても一語対一語にしなければならない理由はない。このようなキーワードでなければ、それほど拘りはしないだろう。

日本語翻訳者が美意識を持ち、文体にエネルギーを注ぐのは望ましいことだが、その翻訳を読む読者が原典の内容の理解と翻訳文の鑑賞のどちらを大事と考えるか。普通は原典の内容ではないだろうか。翻訳の読者は翻訳者が内容の正確な理解より文体として表現する翻訳者自身の美意識を優先しているとは普通思っていない。翻訳の文章の美点は翻訳者のものではなく原典に由来すると普通考えるだろうし、読んで理解困難な箇所があれば、原典がそんな書き方になっているに違いないと考え、翻訳者を批判することはあまりない。自身の知力が及ばないため理解できないのだと理解困難を引き起こした「誤訳・悪訳・曲訳」の責任を被る読者も少なくない。

デカルトの « je pense, donc je suis. » の古い日本語翻訳「我思う」は、デカルト自身のラテン語翻訳では « cogito, ergo sum » と、動詞 « cogitare » が使われている。しかし、中世フランス語の語源、語義としてこれが繋がるのは « penser » ではなく、「cuidier」の

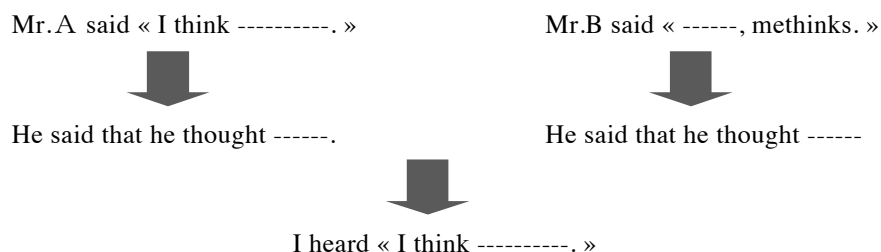
ほうであり、「*penser*」の語源、語義となるのは「*pensare*」だ。こんな場合、デカルトが「*penser*」を「*cogitare*」の意味で使ったと考えれば、日本語の訳語としてまず「思う」のほうが選ばれたことは「より適切」だった。けれども、後にこれを「考える」に替えるべきだと判断した翻訳者は、「思う」では欠けてしまうものがあり、それは重大な歪みになると考えたのではないだろうか。

ラテン語	<u>cogitare</u>	+	<u>pensare</u>	=100%
中世フランス語	<u>cuidier</u>	+	<u>penser 1</u>	=100%
現代フランス語			<u>penser 2</u>	=100%
日本語	思う	+	考える	=100%

しかし、本稿で考えてきたように、「考える」を選んでもやはり欠落を含んでしまう。ではどうすればいいか。翻訳文の文体への過度の拘りを捨てる。「思考プロセス」の「始まり」も「終わり」も含めなければならぬのなら、「わたしは**思い、考える**」のように動詞を二つとも使えばいい。これでデカルトの「*je pense*」は「受動的でシンプル」な認識から「アクティブで複雑」な認識まで覆うことが日本語で示せる。

ただし、「わたしは**思い、考える**」と語る人を見た時、他の人は「この人(or あの人)は**考えている**」と一つの動詞しか使わないだろう。本稿で論じてきた思考プロセス(始まりと終わり or 受動的段階とアクティブな段階)の違いを感じとれるのはただこれを行っている人間(主体)、「わたし」のみで、第三者である他者が客観的に感じとれるものではない。

非人称構文の「*methinks*」と人称構文の「*I think*」の間に意味的な違いはないと言う英語研究者が少なくないようだが、それはこれら二つの表現を使い分けている「わたし」をどうしても客観的に外から見てしまいがちだからだ。他者の目にはどちらの場合も「この人 (or あの人) は**考えている**」としか映らない。語法の転換はごく自然に行われる。



英語もフランス語も「国家語」として確立してゆく歴史の中で言語の「公共性、社会性」を強化したはずだが、「他者の目には見えない一人称に固有の主観」については否定的に扱っただろう。

先に言及した Christiane Marchello-Nizia は中世フランス語にあった「*cuidier*」が近代

になり消失したことを「主観性」の時代から「客観性」の時代への移行を示す現象の一つと説明していたが、それではこの現象を単純化しすぎている。「**cuidier + penser**」をどの人称でも主観的に使っていた時代から、第三者の目に見える厳密に客観的な事実を認識の中心に置く時代へ移行したために、他者には区別できない「始まり」と「終わり」の選択が廃され、「**penser**」一語に統合された、とぐらいは言わなければならないだろう。フランス小説は「三人称」を基本としてその様式、制度を確立してきたが、それはこのようなフランス語の歴史的变化と明らかに連動している。

5. 人間の存在と「ある」「いる」

ところで、わたしたちが自身の存在を認識する「瞬間」は現象としてここで考えてきた「思考プロセス」の先端のはずだが、この「存在」はそう簡単に人間全体には一般化できないのではないだろうか。デカルトは「我々は」でも「人は」でもなく、一人称の「わたしは」と言った。しかし、「**je suis (= I am)**」に使われた動詞「**être (= be)**」はどの人称で使おうとその語義は同じと考えられる。つまり、デカルトの考えた「存在」は動詞の人称変化システムを通じてすべての人称に当てはまることになり、一人称だけでなく、二人称も三人称も該当する。人間は誰でも同じと一般化されてしまう。

けれども、「**je suis**」が「我有り」と翻訳されているのを読むと、日本人は「アクティブに複雑に」考え始める可能性がある。この文語訳はさらに「わたしはいる」という口語に変換することで理解、納得しようとするのだが、この動詞の交替はどうして必要なのか、疑問を感じておかしくないからだ。

この「ある／いる」については、外国人の日本語学習者も、「思う／考える」の使い分けの場合と同様、訝しく思っているところだ。彼らは初級日本語のごく初期に「いる : animal」「ある : non-animal」という選択基準を教えられ、短期間でほぼ間違いなく選べるようにはなる。ただし、どちらも英語の存在動詞「**be**」の意味だとしか考えていない。そして、そのように単純な定義では説明できない用例を上級レベルに進んでから知ることになるのだが、「そのような用法がある」という現実を示す以上の解説は普通行われなからだ。

「文法」は矛盾するものまですべて使われている用法を含む複雑で豊かなものと考えられる方は少なくないが、「語の選択ルール」については古いものと現代のものが現実の世界に共存しているからそう見えるだけだ。「標準」は、国家レベル、地方レベル、地域レベル、世代レベル、・・・個人レベルのものが共存、混在するのだから、どのスタイルを選ぶかは簡単ではないが、各人がそれぞれ使う選択ルールはごく単純なはずだ。そうでなければ選ぶことができなくなる。

「あの人はふたり子どもが**ある**」「ある村に男が**あった**」のような使い方は現代日本語の規範文法では違反していることになり、現在は「子どもが**いる**」「ある村に男が**いた**」のほうが標準と見られる。デカルトの「我有り」も同様で、現代の標準的な日本語では「わたしは**いる**」になる。

新しい用法と古い用法が共存し、文体として選択されることは日本語に限らず、どんな言語でもあるはずだが、前の王朝の名残となりそうなものを徹底的に消し去ったり、既存のシステムを革命によって徹底的に排除したりするようなことをせず、神道、仏教、儒教、キリスト教・・なんでも共存させる日本らしく、歴史上一度存在したものは存在を保証される。そして、「*être*」の翻訳に使える動詞には更にもう一つ「おる（謙譲 → 一人称性）」のあることを思い出す。

フランス語や英語のように「存在」を表す動詞が一つしかない言語からは二つも三つ使う日本語はおかしいと見えるだろうが、逆に日本語サイドからは一つしかないことに驚きを覚えてもおかしくない。「存在」、特に「人間の存在」は現実には知覚される現象として一様ではないからだ。一人称／二人称／三人称はそれぞれ様態がまったく異なる。

わたしが今ここで「あなた」と呼びかけることができる人は、姿、表情が見え、動けば目で追うのだが、何を考えているのかその心は分からず、推量し続ける。そして、そんな「あなた」は1分前／1週間前／1ヶ月前／1年前／…とも変わらないと同定でき、さらにこの後、時間が経っても変わらないと感じている。一方、そんな「あなた」を見ている「わたし」は、自分の表情、姿が見えないのだが、心は分かる、というより、心そのものとなっている。また、同定し、対象化できる「自分」は「過去」か「未来」のイメージだけだ。とはいえ、そんなことをするのは「今のわたしは昔とは違う」、「こんなわたしではいけない。変わらなければ」というように「異なる二人のわたし」を比べる時だけではないだろうか。「今」のわたしは思考している「主体」であり、同時に「対象」とはなりえず、知らないうちに変わってしまい、変わってしまってもそれに気がつかない。そして、**典型的な三人称**の対象、ここではないほかの場所にいる「子」「家族」「友」などはそもそもここにいない。わたしの臉、心に浮かぶそのイメージは動かない。**animals**なのだが、**non-animal**の「物」のように。

これだけ様態が違えば、それぞれ区別できる言葉があるほうが自然なのではないだろうか。不定詞「*être*(= *be*)」は現象的ではまったくなく、これら特殊な様態を**第三者の目**で一般化することによってしか生まれない社会的、公共的な認識の様式であり、制度だ。

デカルトはまずフランス語で書いた「*je pense*」をラテン語で語源として対応する「*penso*」ではなく、対応していない「*cogito*」と翻訳しているが、デカルトはこの動詞が「より適切」と判断したのだろう。

「翻訳」は原文の内容をできるだけそのまま別の言語で写すものと考えれば、この場

合、語義がずれているのだから、適切な翻訳とは見えない。しかし、このラテン語訳はフランス語を理解しない人のために表わされたのではなく、**フランス語もラテン語も解する読者**に二つ並べて示すためのものなのではないだろうか。語義のずれと見えるものは本稿で言及したラテン語 « cogitare » を語源とする動詞 « cuidier » のフランス語からの消失、その語義の « penser » への吸収・統合によって生じる理解の歪みを補正する意図が感じられなくない。

「思考プロセス」の最初の瞬間にある「シンプルで受動的」な認識が « cuidier » とともにフランス語から消えたわけではないことは、A: « Comment trouvez-vous ce tableau ? (この絵をどう思いますか) » と B: « Qu'est-ce que vous pensez de ce tableau ? (この絵をどう思いますか) » とが同義的に使われることが示している。「penser」を使う B はさまざまに思考を巡らした結果である複雑なコメントを求める場合に適しているはずだが、「瞬間性」を表現する « trouver(見つける/発見する) » を使い、構文も「目的語+目的格補語」のように一語か二語のシンプルな感覚的評価を求める A の言い換えに使われる。これは、「penser」が「複雑でアクティブ」な思考だけでなく、「シンプルで受動的」な思考までカバーしているということだろう。

日本人は「考える」より「思う」を標準のように多用するが、英語 « How do you feel ? » の翻訳のような「どう感じる?」、またこれに意味合いの近い「…の第一印象は?」とよく人に質問し、複雑な思考に入る前の「受動的でシンプル」な感想を大事にする。

刹那的で感覚的な評価は「主観的」と言わざるを得ないが、「長い思考によって主観が形成される前のありのままの自然な意識の状態」を示す。すると、「動物的で偽りがない → 即物的 → 客観的」と見なせなくもない。「客観」が事実というより目標としてあるのに対し、「主観」が存在すること自体は間違いなく客観的事実だ。日本人の「我/わたし」は「一時の気の迷い」で間違いを犯し、確かではないもの、移ろいゆくものに執着しやすく、そんなあり方をいつも思い悩んでいる。

6. おわりに

本稿は2015年5月青山社発行の雑誌『流域』第76号に筆者が発表した論考型エッセー「日本語とフランス語の間で… — Je cuid et pense en J/F, donc je suis —」に例と考察を加筆し、修正を加えたものである。雑誌『流域』はフランス文学研究者を主な対象読者とするため、使用したフランス語の材料にはあまり説明を付けていなかった。また、日本語縦書きの紙面に90度回転したフランス語が混じるため、論証の材料としたフランス語、英語がひじょうに読みにくくなっていた。本稿では横書きであるため、日本語の本文とフランス語、英語の論証材料が対照しやすくなったが、日本語訳を付けていな

いフランス語にはできるだけ英語の対応語を並記した。二つの版の違いから何か考え始めて頂ければと思う。(了)

1) *La Mort du roi Arthur*, traduit en français moderne par Monique Santucci, Honoré Champion, 1991, p.26

2) *La Mort Le Roi Artu*, édité par Jean Frappier, M.J.Minard, 1964, p.3

3) *Language Evolution and Semantic Representations - A Case Study of the Evolution from "Subjectivity" to "Objectivity" in French*, In: Fuchs, Catherine and Stéphane Robert (eds.), *Language Diversity and Cognitive Representations*, LLACAN-CNRS, 1999

4) 天沢退二郎、**アーサー王の死**、フランス中世文学集第4巻 - 奇蹟と愛と -、白水社、1996年、10頁

5) 中世フランス語から現代フランス語への翻訳では、中世フランス語原文の構文や語彙が現代フランス語で同じように使われているものでも、そのままにはいけないかのように書き換えられる。「**散文**」の論理的定義通り、構文や語彙を変えても**同じ内容**が示せなければならないと考えるからだ。

日本語翻訳、現代英語への翻訳では中世フランス語に由来するものがそれほどないため、文法構造をできるだけ再現できるよう直訳的に訳すことが多いが、フランス語とは構成原理の異なる慣用句や定型表現に変えてしまうことも少なくない。

チャーサーの中世英語版『薔薇物語』には2001年に公刊された瀬谷幸男訳があるが、未入手のため、ここではチャーサーしか使っていない構文を拙訳によってできるだけ再現を試みた。

6) 中世英語訳の冒頭部、25～27行目、49～53行目だけで合わせて4回、動詞を非人称構文／非主格人称構文で使っているのだが、原典の中世フランス語でこのような構文になっているのは2回だけ、フランス語原典から現代英語への翻訳では1回しかない。これだけの例でじゅうぶん「文法の論理を効果的に使ったレトリック」なのかと感じさせる。

中世フランス語原典 (Lecoy 版)	中世英語 (Benson 版 Chaucer)	現代英語 (Dahlberg)
Et vi un songe	Me mette such a swevenyng	I saw a dream
Qui mout fu biaux et mout me plot	That lyked me wonders wel	beautiful and pleasing
Avis m'iere que	me thoughte	I became aware
ce songeoie	thus dremed me	I dreamed